

日本の健康・医療・医学に貢献し、現役で活躍し続ける75歳以上の方々を顕彰する
「第4回 山上の光賞」の授賞式を開催。5部門7名が受賞

公益社団法人 全日本病院協会(会長:猪口 雄二)、一般社団法人 日本病院会(会長:相澤 孝夫)、およびセルジーン株式会社(代表取締役社長:野口 暁)は、2018年6月20日(水)にパレスホテル東京にて、「第4回 山上(さんじょう)の光賞」の授賞式を執り行いました。

授賞式では、医師部門、研究者部門、看護・保健部門、NPO・ボランティア部門、公衆衛生部門の5部門7名の受賞者に記念杯が贈られ、受賞者の所属機関へ賞金100万円が贈呈されました。



本年度の受賞者は以下の通りです。(詳細はP2～P4をご参照ください)※敬称略

医師部門	黒川 清 (くろかわ きよし) (81歳)	特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事
	祖父江 逸郎 (そぶえ いつろう) (97歳)	公益財団法人 長寿科学振興財団 理事長
研究者部門	半場 道子 (はんば みちこ) (80歳)	福島県立医科大学医学部整形外科学講座 客員講師
看護・保健部門	池田 きぬ (いけだ きぬ) (93歳)	株式会社セントレア いちしの里 訪問看護師
	南 裕子 (みなみ ひろこ) (75歳)	高知県立大学大学院 看護学研究科 特任教授
NPO・ボランティア部門	大石 由紀子 (おおいし ゆきこ) (79歳)	Oishi サポートセンター代表/Tada パーキング 代表取締役
公衆衛生部門	山口 昇 (やまぐち のぼる) (85歳)	公立みつぎ総合病院 名誉院長・特別顧問

「第4回 山上の光賞」受賞者(敬称略)

【医師部門】

黒川 清(くろかわ きよし) (81 歳)

特定非営利活動法人日本医療政策機構 代表理事

東京大学医学部を卒業後、同大学院医学研究科修了。東京大学医学部附属病院インターンを経て、63 年に同第一内科へ入局。その後 69 年から米国へ留学、当時としては異例の 14 年の滞在期間にはペンシルベニア大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)、南カリフォルニア大学と、3 大学の医学部を渡り歩き、UCLA 内科教授となった。カリフォルニア州医師免許、米国内科専門医、腎臓内科専門医の資格を持つ。

83 年に東大に戻り、米国式の臨床講義、教授回診のプレゼン、新しい医学教育に取り組むハーバード大と東大の学生交流などを実施するなど日本の医学部教育の改革に着手した。60 歳の定年を目前に控えた 96 年、東海大学医学部長に就任。日本の大学に根付くタテ社会の論理に問題意識を持ち、臨床、教育、研究など後輩の育成に精を出した。次世代の「独立した」「アカデミック・フィジシャン」を育てる責任は教授にあるという欧米の哲学を胸に、長年にわたって世界に通じる一流の医師を育てることに貢献してきた。

81 歳を迎えた今も世界各国を飛び回り、次世代のリーダーが育ってくる国際社会を相手に、グローバルヘルス政策を展開するため活動が続いている。国際関係に太いパイプを持っているが、代々医師の家系に生まれ、自身も医師として医療界の重鎮とされている存在である。医師、教育者、研究者としての道を極め、卓越したリーダーシップと行動力によって日本の科学者を代表する機関である日本学術会議をリードしてきた他、日本の医療が抱える高齢化社会に対する課題に斬り込み、国際社会に対応できるような日本の医療改革を推し進めている。



祖父江 逸郎(そぶえ いつろう) (97 歳)

公益財団法人長寿科学振興財団 理事長

第二次世界大戦中の1943 年に名古屋帝国大学医学部を卒業。大戦時には戦艦大和に海軍医大尉として乗艦し、日本軍の命運を決めたと言われるレイテ沖の海戦に参戦したという異例の経歴を持つ現役の医師である。幸い戦艦大和が撃沈される前に海軍兵学校附教官に発令、転勤となり艦を離れたために、終戦直後は第二復員官となり戦地引揚者の支援と医療活動に従事した。

祖父江氏の医師としての活動は大きく2つあり、ひとつは医学・医療における研究と診療。もうひとつは医学・医療を社会的に普及させるための社会活動である。前者においては専門である内科学や神経内科学をベースに、薬害として注目されたスモン病、ALS(筋萎縮性側索硬化症)、パーキンソン病など難病の原因究明と治療法開発に貢献した。後者の社会活動においては、国立療養所中部病院の院長として在任中に、日本で初めての老化・高齢化を扱う研究センターである現国立長寿医療研究センターの構想の提案から開設にと尽力した功績は大きい。医療と社会との連携を深め、地域住民の健康増進とQOL(生活の質)の向上を目指す活動を広げている。

現在は公益財団法人長寿科学振興財団の理事長として、日本が直面している認知症、骨粗鬆症、心虚血性疾患、脳血管障害など高齢者疾患に加え、老年症候群、高齢者特有の脆弱性の問題、健康、経済、孤独の3Kといわれる心身面や社会的側面の諸問題など高齢化社会の課題を解決すべく、97 歳を迎えた今も高齢者のロールモデルとして現役で活躍が続いている。



【研究者部門】

半場 道子(はんば みちこ) (80 歳)

福島県立医科大学医学部整形外科学講座 客員講師

静岡県立大学薬学部薬学科卒業後、群馬大学医学部助手、1976 年、同医学部にて博士号を取得。その後、昭和大学講師、東京医科歯科大学講師を経て、現在は福島県立医科大学で客員講師を務めながら、研究者として痛みの神経科学究明に尽力している。「痛み研究」の草分け的存在であり、がん性疼痛の緩和、術後疼痛の軽減などに成果を挙げた。

長年に亘って取り組んできた研究の一つが慢性痛の解明である。慢性痛の患者数は年々増加し、各国とも人口の 2 割に達している。脳回路網の変容を伴う慢性痛には鎮痛剤が効かない例が多く、治療は難渋している。痛みは人が生きる上で最大の苦しみであるが、最大の謎でもあった。整形外科学会、ペインクリニック学会などへの講演を通じて、臨床領域に「痛みの神経科学」を浸透させ、治療レベルを飛躍的に向上させてきた。脳画像を駆使した著書は、痛み治療に苦慮する医師たちの道標となり高い評価を得ている。これらの活動は、医学会において女性の活躍が社会的に認められる契機となった。1995 年、日本生理学会に「生理学女性研究者の会(WPJ)」を創設し、初代代表を務めた。女性研究者の相互交流を通じて、研究環境の改善と研究業績の向上を目指し、活発な活動を続けている。ひとりの女性研究者が多くの学術学会に影響を与え、日本における女性研究者の環境向上に尽力し、男女共同参画に導いた功績は高く評価されている。



【看護・保健部門】

池田 きぬ(いけだ きぬ) (93 歳)

株式会社セントレア いちしの里 訪問看護師

1934 年、現在の三重県津市にあたる一志(いちし)郡大井村で誕生。地元の女学校を卒業後、手に職をつけなければとの思いから看護師の道を選んだ。以来70 年あまり、90 歳を超えた今も現役の訪問看護師として活躍している。

看護師になり最初の現場は、当時の日本軍が療養所としていた神奈川県内の旅館だった。19 歳にして看護要員として召集され、軍医の指示のもと厳しい環境の中で様々な傷病兵の看護に励むうち、命を大切にす信念のもと、どんな状況下でも負けない精神力がついた。47 年に地元に戻り、三重県内の病院に看護師として勤務したほか、企業の保健師としても活躍した。94 年には三重県看護協会役員も務めた。看護師としての励みは、何より患者さんの体調が改善したり、家族から喜ばれることである。

1999 年、当時75 歳の時に県内最高齢でケアマネージャーの資格を取得。「介護と医療の両面から患者を支えたい」との思いから2012 年より高齢者向け住宅施設「いちしの里」で週2回、朝8時から夕方5時まで勤務している。現在、施設では約50 人の入居者があり、自身より年下の入居者を励ましなが、親身になって寄り添い、体調管理と介護のサポートに当たっている。医療・福祉の現場でも高齢化が進んでおり、看護職の不足は慢性的な問題となっている。看護師は長く働ける職業であると証明している池田氏の活動は、高齢化社会の中でも働く場を広げる契機になっている。



南 裕子(みなみ ひろこ) (75 歳)

高知県立大学大学院 看護学研究科 特任教授

日本看護協会会長、国際看護師協会会長の経歴を持ち、国内外の看護界を牽引している南氏は、日本にまだ看護学博士号取得の道が開かれていない1982 年、カリフォルニア大学サンフランシスコ校で看護学博士号を取得。その後、聖路加看護大学(現在の聖路加国際大学)に日本で初めての看護学博士課程の開設に貢献した。兵庫県立看護大学、近代姫路大学、高知県立大学の学長を経て、看護学と他の学問領域とをつなぐ役割を長年担ってきた。

兵庫県立大学学長を務めていた1995 年に阪神・淡路大震災が発生した。当時、日本看護協会の現地対策本部を学内に置き、全国から看護ボランティアを募って被災者のケアに奔走した。看護にあたる地元の看護師たちは自身も被災者であることから、精神的に追い詰められる場面も目の当たりにし、支援者側のケアにも尽力した。救命救急の活動だけでなく、被災者の生活環境を整える手助けをすることが大切な役割だとして、経験に基づいた災害看護の分野を確立させた。その後、日本の災害支援および災害復興を推進する組織の必要性から仲間とともに、1998 年に日本災害看護学会を設立。2008 年には世界災害看護学会を立ち上げ、第一回の大会長を務めた。

看護学の博士課程および修士課程の拡充を推進するとともに、国民の健康を守るために必要な、社会と医療界の変化に対応できる専門看護師等の育成に尽力し、看護ケアの向上とイノベーションをもたらした。2005 年から2009 年にかけては国際看護師協会の会長を務め、世界の看護の発展と看護の質の向上に貢献した。2014 年からは国際協力機構 Bangladesh 看護サービス人材育成に携わるなど、国際的にも重要な功績を果たしている。



【NPO・ボランティア部門】

大石 由紀子(おおいし ゆきこ) (79 歳)

Oishiサポートセンター代表/Tadaパーキング 代表取締役

今から 50 年以上前より自宅で英語教室を開く傍ら、不登校の相談など様々なボランティア活動に携わっていた。その活動の一環で保護司の委嘱を受け、売春防止法違反で服役し仮釈放を受けた女性の保護観察を担当した。その女性が 2 年後に覚せい剤取締法違反で再び服役し、管理売春も続けていたことを知った際に、更生と被害防止ができなかったことに無力感を抱き、人身売買の外国人被害者を対象にした相談窓口「Oishi サポートセンター」を開設した。

人身売買の多くは、国境を超えた犯罪組織が介在するとされ、政府間協力による摘発が不可欠であり、何より被害に遭った女性の自立支援が必要である。現状を広く知ることから始めようと、講演会などを催し問題の重大さを訴え続けた。大石氏のもとには、これまでに 1000 件以上の相談が寄せられ、ひとりひとりに向き合い被害者の立場に立った救援に尽力している。公的保護施設や支援施設への仲介だけでなく、女性に対する性犯罪、いじめや虐待などの被害者に寄り添った心のケアに熱心に取り組み、その声を行政に届けることで支援制度の充実を目指す。

国内外の様々なネットワークを駆使して、広報・啓蒙活動を続け、人身売買の防止に向けて国際的な活動を続けてきた。これまでにニューズウィーク日本版にて「世界が尊敬する日本人」の一人に選ばれた他、日本社会貢献支援財団賞、東久邇宮国際文化褒賞を受賞。また、複数の報道メディアにもその奉仕活動が取り上げられるなど、タブーとされてきた課題に先駆的に取り組んだ姿勢は社会から注目されている。



【公衆衛生部門】

山口 昇(やまぐち のぼる) (85 歳)

公立みつぎ総合病院 名誉院長・特別顧問

1966 年に広島県御調(みつぎ)町の御調国保病院(現在の公立みつぎ総合病院)の病院長として就任。地域住民は病院医療だけではなく保健・福祉・介護も必要としていたと考え、退院後の在宅医療、すなわち福祉・介護サービスも提供できる体制を構築した。病院の基本理念を「地域包括医療の実践と地域包括ケアシステムの構築」とし、当時は画期的だった院内保健福祉センターを併設。また広島県御調町の厚生課の保健部門と住民課の福祉部門を移管するなど、行政機構として地域包括ケアシステムを実現させた。

地域の実情に応じて、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で能力に応じ「自立した」日常生活を営むことができるよう支援を包括的に確保するこの体制は、全国で実現すべき政策として多くの自治体で取り組まれている。このケアシステムの名称は、日本で最初に言葉として使い、自ら実践したものである。それが現在では全国的な目標として掲げられるまでになった。

リハビリテーションにおいては、寝たきりゼロ作戦を提唱し、病院におけるリハビリだけでなく、地域において訪問でのリハビリテーションの推進に取り組んだ。介護保険制度が定められてからは訪問看護やリハビリが当たり前になっているが、制度がまだない時代から先駆的に在宅ケアに取り組んできた。

今日の高齢化社会において必要不可欠になっている「地域包括ケアシステム」の生みの親として、多くの保健・福祉・医療関係者の羅針盤となり幅広く活動している。



「山上の光賞」とは

「山上の光賞」は、日本の健康・医療・医学分野において、豊富な経験、知識を駆使しながら、より良い社会の構築に向けて今も現役で活躍し続けている 75 歳以上の方々を顕彰するプログラムです。高齢化社会が進む日本において、後輩の進むべき道を照らす「山上の光」となるような貢献を続けている方々を顕彰することで、日本のシニアを勇気づけ、活発な社会の一員として活動し続ける素晴らしさを伝えることを目的としています。

【「第4回 山上の光賞」概要】

- 名 称 山上の光賞(さんじょうのひかりしょう)
- 共 催 公益社団法人 全日本病院協会
一般社団法人 日本病院会
セルジーン株式会社
- 後 援 外務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省
日本医学会、公益社団法人 日本医師会、
公益社団法人 日本看護協会、一般社団法人 日本慢性期医療協会
- U R L www.sanjo-no-hikari-sho.com
- 顕彰部門 医師部門、研究者部門、看護・保健部門、NPO・ボランティア部門、公衆衛生部門
- 表 彰 記念杯を受賞者本人へ、賞金 100 万円を受賞者の所属機関へ寄付

審査委員・諮問委員(五十音順、敬称略)

※各人は必ずしも所属先の代表として「山上の光賞」の審査委員/諮問委員を務める訳ではありません。

《審査委員》

安西 祐一郎	独立行政法人日本学術振興会顧問・ 学術情報分析センター所長	藤崎 一郎	一般社団法人日米協会会長、 元駐米大使
坂口 力	東京医科大学特任教授、 元厚生労働大臣	古川 貞二郎	恩賜財団母子愛育会会長、 元内閣官房副長官、元厚生事務次官
笹津 備規	東京薬科大学学長	向井 千秋	東京理科大学特任副学長、 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA)技術参与
中川 俊男	公益社団法人日本医師会副会長	渡辺 允	元宮内庁侍従長、元駐ヨルダン大使
樋口 恵子	NPO 法人高齢社会をよくする女性の会理事長、 東京家政大学名誉教授、 同大学女性未来研究所所長		

《諮問委員》

石田 祝稔	衆議院議員	立川 敬二	立川技術経営研究所代表、 元宇宙航空研究開発機構構理事長、 元 NTT ドコモ社長
今井 裕	東海大学副学長、 東海大学伊勢原校舎・付属病院本部本部長	谷合 正明	参議院議員
大塚 太郎	青梅慶友病院理事長	とかしき なおみ	衆議院議員
大塚 義治	日本赤十字社副社長、 元厚生労働事務次官	中山泰秀	衆議院議員、衆議院外務委員長
加藤 益弘	ミラバイオロジクス株式会社代表取締役社長	羽田 雄一郎	参議院議員、元国土交通大臣
河北 博文	公益財団法人日本医療機能評価機構 理事長、 社会医療法人河北医療財団理事長	坂東 眞理子	昭和女子大学理事長・総長
紀伊國 献三	公益財団法人笹川記念保健協力財団 最高顧問	福井 次矢	聖路加国際病院院長、聖路加国際大学学長
幸田 正孝	医療経済研究機構顧問、 元厚生事務次官	古川 元久	衆議院議員、元国家戦略担当大臣
佐々木 伸彦	富士通株式会社執行役員副会長、 元経済産業審議官	溝口 善兵衛	島根県知事
新藤 義孝	衆議院議員、元総務大臣	三ッ林 裕巳	衆議院議員
高成田 享	仙台大学教授、元朝日新聞論説委員	百村 伸一	自治医科大学附属さいたま医療センター センター長
		森口 泰孝	東京理科大学特別顧問、 元文部科学事務次官
		吉澤 靖之	東京医科歯科大学学長
		渡辺 孝男	米沢市病院事業管理者、元参議院議員



公益社団法人 全日本病院協会について

全日本病院協会は、昭和 35 年に民間病院を主体とした全国組織として設立、昭和 37 年 9 月に社団法人として認可、そして平成 25 年 4 月に公益社団法人として認定され、現在、約 2,500 病院が加入しております。「全国の病院の一致協力によって病院の向上発展とその使命遂行に必要な調査研究等の事業を行い、公衆衛生の向上、地域社会の健全な発展に寄与することを目的とする」という理念の下、「国民に安心・安全で質の高い医療を医療人が誇りと達成感を持って提供できるような環境整備を行う」という基本的考え方を実現するために、多くの活動を行っております。詳細は当協会ホームページをご参照ください。<https://www.ajha.or.jp/>

一般社団法人 日本病院会について

日本病院会は、会員数 2487 病院(2018.5)、日本の病院の全ての経営主体が参加する広範な会員組織です。昭和 26 年 6 月の創立以来、「病院の向上発展と使命の遂行を図り、社会福祉増進に寄与する」ために、「医の倫理の確立」と「病院医療の質の向上」を目指して活動してきました。平成 24 年 4 月より一般社団法人となり、この間、当会は病院の活動と病院で働く者の行動の規範を定め、絶えず自浄作用を促し、医の倫理の高揚に努めています。詳細は当会ホームページをご参照ください。<http://www.hospital.or.jp/mokuteki/>

セルジーン株式会社について

セルジーン株式会社は、米国ニュージャージー州に本社をおくグローバルバイオ医薬品企業セルジーン社の日本法人です。セルジーン社は、世界 50 カ国以上で事業を展開、社員 8,000 人以上を擁し、血液、がん、炎症・免疫性疾患に対する新しい治療法を開発し提供しています。2017 年のセルジーン社全体の売り上げは約 130 億ドル(対前年比 16%増)でした。研究開発に積極的に投資し、患者さんに貢献する医薬品の開発を積極的に進めています。詳細は弊社ホームページをご参照ください。<http://www.celgene.co.jp/>